

## 犀川スキーバス事故 学内追悼集会 学長挨拶

今から39年前の1985年1月28日、学生22人、教員1人、バス乗務員2人、合計25人の尊い命が失われた犀川スキーバス事故が起きました。

この22名のなかに、私の高校の同級生がいます。彼女は児童福祉の専門職を目指して、84年の春に日本福祉大学に進学しました。夏に会ったとき、大学の勉強はとてもおもしろい、でも親に迷惑をかけないように生活費をかせぐためアルバイトは大変だと語っていました。1年生の冬でした。体育の授業でスキー合宿に行くことになりました。合宿でスキーを教わることはもちろん、集中講義で単位がとれるので、人気の授業だったといえます。学生たちは楽しみに美浜キャンパスを出発したのでしょうか。長野のスキー場に近づいた早朝5時45分頃、バスはガードレールを突き破り、犀川のダム湖に転落しました。

今、あなたは生きていれば何をしていますでしょう。どんな仕事をして、どんな家庭を持って、どんな人生を歩んでいたでしょう。先日、久しぶりにあなたのお墓参りに行ってきました。あなたのご両親も一緒に同行してくれました。私の両親もそうですが、あなたのご両親も高齢になりました。おじさんは少し体調が悪いと言っていました。看護師だったお婆さんは今も地域活動をしているそうです。昔と変わらず仲の良いご夫婦でした。そろそろあなたが迎えに来てくれるかもしれない、そんなことを笑いながら話し、しばらくあなたとの思い出を話してきました。

犀川の事故現場には、慰霊碑があります。1月28日は毎年、現地でも法要をしています。以前はたくさんのご遺族が集まりましたが、みなさん90歳前後になり、あの極寒の現地まで来られるご遺族は少なくなりました。その代わりお手紙やお電話をいただきます。40年近く経った今も、我が子を突然失った悲しみは癒えるものでないことを痛感しています。

当時、大学の責任を問われました。大学の正規の授業として実施したのですから、実施計画に安全性はしっかり配慮されていたのか、危機管理の体制はきちんとできていたのか、学生の命を奪った責任を大学はどう受け止めるのか、ご遺族からの追求に、ただただ頭を下げるしかなかったと伺っています。それは今も同様です。大学ができることは、学生や教員の命が失われたということに対して、道義的な責任を果たし続けるしかないのです。

そして二度と同じような悲劇を繰り返さない。慰霊碑には「悲しみを二度とあらしめぬために」と刻まれています。学生と教職員の命を守るために出来ることを最大限に、気を緩めることなく、全学で取り組んでいくこと。そしてこの事故を風化させて、過去の出来事にするのではなく、大学として25名の方々のいのちに向き合い続けていくことです。

33回忌の法要のとき、あるご遺族が「大学はよくやってくれた。息子を日本福祉大学に進学させてよかった」と言っていました。ただただ涙が出て仕方ありませんでした。事故当時の教職員や多くの同窓生たちがずっと支え続けてきたことへの感謝の念でした。

それは大学だけではありません。スキーバスを運行していた三重交通も、現在も社をあげて慰霊に取り組んでくださっています。毎年1月28日の現地法要の際は、雪深い現地でご

遺族が怪我をされないように、社員が前日から現地に赴き、雪を溶かし、道をつくる等、安全の確保に努めてくれています。また現地では慰霊碑周辺の清掃や草むしりを本学卒業生や周辺にお住まいの方が、人知れず行ってくれています。

こうした多くの皆さまのお気持ちを大切にしつつ、今年もみなさんと一緒に犠牲になられた方々を追悼する思いを込めて合掌したいと思います。

ここ「友愛の丘」は2003年の春にできました。今日は半田キャンパスや東海キャンパス、名古屋キャンパスで視聴してくれている皆さんもいます。美浜キャンパスにいても、ふだんこの場所に来ることは少ないかもしれませんが、私たちが何か悩んだとき、迷ったとき、あるいは他人には言えない嬉しさが込み上げてきたとき、ここで耳を澄ましてください。この丘は、日本福祉大学の良心と優しさ、そして希望が詰まっている場所です。春になったら新緑のもとで、たくさんの学生たちが、この友愛の丘で、お弁当を食べて語り合ってくれたらと思います。

最後に、1月1日に起こった能登半島地震で犠牲になった皆様、避難をされている皆様に心からお見舞い申し上げます。本学災害ボランティアセンターを中心に、被災地のみなさまに寄り添う支援活動をしていく予定です。

このあとの献花のときには、能登半島で被災された皆様、そして世界で続いている戦争で犠牲になった一人ひとりの尊いのちに想いを寄せて、手を合わせていただければ幸いです。

2024年1月26日

日本福祉大学学長 原田 正樹